

幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。119:2 幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。119:3 まことに、彼らは不正を行なわず、主の道を歩む。119:4 あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。119:5 どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。119:6 そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはないでしょう。119:7 あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。119:8 私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。

以下の二つの文章を聴き比べてください。「～さんは望みが叶って幸いだ。」「～さんが幸いになりますように。」どちらの文にも「幸い」ということばが入っていますが、使われ方は違います。最初の文の「幸い」は、既に望みが叶ったことに対する祝辞です。後の文の「幸い」は、対象者にこれからは幸いになってほしいという願いや祈りとして使われています。

ところで、冒頭の箇所でも「幸い」が使われていますが、前述の二つの例の、最初の「幸い」と同じ使い方です。願いや祈りではなく、すでに幸いを得た人への祝辞です。「幸いなことよ。～な人々。」は「～な人々は幸いだ。」と前後の入れ替えも可能です。私たちの救い主イエスも、ある山の上で弟子たちに行なった説教で、この詩篇の作者と同じように「～な者は幸いです。」という表現を使いました(マタイ 5:1-11)。人間が決める幸福の基準は様々ですが、聖書はどのような人に対して、「あなたは幸いだ。」と祝辞を述べているのでしょうか。今日は聖書が教える「幸いな人」について学びましょう。

I. 神に従って歩む人は幸い

詩篇 119 篇は 22 の部分に分けられ、それぞれの部分が 8 節ずつ構成されています。そして、それぞれの部分の最初の文字はヘブル語のアルファベット順になっています。日本の「いろはガルト」と同じような構成です。つまり、詩篇 119 篇はヘブル語の「いろは詩篇」です。作者は聖書が永遠の神の、永遠に変わらないことばであることを、私たちに読者に先ず思い起こさせています。その上で、1 節から 4 節では、神を信じて従う人の幸いについて教えています。

ヘブル語の詩の特徴は三つあります。一つ目は、前半と後半が別々のことばで同じことを語ります。二つ目は、前半と後半が対照的なことを語ります。三つ目は、後半が前半を敷衍(詳説)します。1 節では、「全き道を行く人々」は「主の教えに従って歩む人々」と言い換えられています。主の教え、つまり、神の教えは全き道です。人間が歩むための唯一で完全な道です。イエスは十字架に架る前夜の祈りで、神のことば(聖書)を「真理」と呼びました(ヨハネ 17:17)。神には一点の汚れも罪も過ちもありません。神は公正で、えこひいきをしません。神は物事を正しく判断できます。神は罪に汚れてしまった人間をなおも愛して、救いの道を備え、聖書に書き記しました。神が完全なので、神のみことばである聖書にも誤りはありません。神のことばは私たち人間が信頼して歩むことのできる道です。ですから、神のことばを人々に説き明かしたイエスは、自分自身のことを「わたしは道です」と言いました(ヨハネ 14:6)。

神は全き方で、神のことば(=さとし、戒め、おきて、仰せ、さばき)は全き道です。それだけでなく、神は神のことばを通して私たち罪人を「全き人」に生まれ変わらせることができます。例えば、神は大洪水の時代の信者であるノアを「全き人」＝「正しい人」と呼びました(創世記 6:9)。しかし、ノアの場合の「全き」は神や神のことばがそれ自体きよいのという意味が異なります。なぜなら、最初の両親アダムとエバの墮落以来、すべての人の本質は生まれながらに汚れているので、神のきよさの基準でみれば、ノアも罪人だったからです。事実、1 年以上に及んだ大洪水から救われた後、ノアはぶどう酒を飲み過ぎて酔っ払い、裸になるという醜態を子どもたちに曝しました(創世記 9:21)。

では、なぜ神はこの詩篇の 1 節と同じ「全き」を、ノアを形容するために用いたのでしょうか。私たちは新約聖書の中にそのヒントを見つけることができます。私たち人間はたとえ最善を尽くしても、自分の努力や善行や修行によって自分をきよめることができません。自分の罪とそれに対する神の怒りを取り除くことができません。そのように惨めな私たち人間を救うために、父なる神は子なる神に人間の肉体を取らせ、この世に遣わして、すべての人の罪を身代わりに背負わせ、地獄の苦しみを味わわせ、罰して、すべての人の罪を償わせました。その子なる神がイエス・キリストです。イエスが身代わりに死んだので、神はすべての人の罪に対する怒りを鎮めました(2 コリント 5:19)。イエスのきよく尊い命を、すべての人の罪を償う代価として受け入れました。イエスの復活はその証明です。

イエスの身代わりの償いのお陰で、イエスを救い主と信じる人は誰でも、条件なしに、神の御前で「義人」と認められます。罪のない者と認められます。神がその人を神の法廷で「全き人」と宣言します。ノアはイエスが生まれる遙か前の人ですが、創世記 3 章 15 節に書かれている救い主についての神の預言を伝え聞いて、信じました。創世記 3 章 15 節の「女の子孫(=彼、救い主)」を信じました。その信仰を通して、神の恵みによって、ノアは神の御前で「全き人」と認められました。神によって「全き人」と認められた人も、天国に入るまでは罪深い性質を持ち続けます。そのため、心やことばや行ないによ

って毎日罪を犯します。しかし、神の律法が指摘する罪を認め、悔い改めます。神に赦しを求め、神からの赦免のことばによって心を安らかにします。そして、その人は神の愛や恵みに感謝する心から、神が喜ぶ生活をするように変えられます。そのような生活は神に祝福されます。

モーセもパウロも第四から第十の戒めを人々に教えた時、「第～の戒めは～です。これを守りなさい。」とだけ伝えたものではありません。「戒めを守るならあなたがたの齢は長くなる」と、戒めを守る者に神が与える地上の祝福を伝えました（出エジプト20:12；申命記6:3；エペソ6:2,3）。たとえ信者でも十の戒めを完全に守れないし、十の戒めを守ることによって神の法廷での無罪や天国での永遠の命を獲得できませんが、戒めに従うことによって地上の生活は祝福されます。例えば、子が親を、生徒が先生を、若者が年配者を、従業員が経営者を、国民が政府を敬うならば、社会の秩序は保たれます（第4の戒め）。もちろん、敬われる側は正しくあるべきです。争い、いじめ、殺人がなければ、誰もが安心して暮らせます（第5の戒め）。夫と妻が生涯愛し合い、尊敬し合い、支え合うなら、幸福な夫婦が増えます（第6の戒め）。詐欺、窃盗、強盗がなければ、住みやすい社会になります（第7の戒め）。人々が互いの評判を尊重し合うなら、傷付け合うことはなくなります（第8の戒め）。

この詩篇の作者も戒めを守る者が受ける祝福を知っていたので、「全き道に行く人は幸いだ。主のみおしえによって歩む人は幸いだ。主のさとしを守る人は幸いだ。心を尽くして主を尋ね求める人は幸いだ。不正を行なわない人は幸いだ。戒めを堅く守る人は幸いだ。」と、同じ意味のことを異なることばでくり返しました。作者は神のことばに従って歩む幸いを体験したので、他の人にも体験してもらいたいと強く思いました。また、神が約束を守る方であることを知っていたので、神の教えに従って歩む人に対して、「あなたは幸いだ。」と前もって祝辞を述べました。

II. 神に全面的に信頼する人は幸い

作者は1節から4節で、神の教えに従って歩む人の幸いについて語りました。しかし、それに対する読者の反応については何も書いていません。なぜなら、信仰は命令や強制や説得によって生まれるものではないからです。信仰は神のことばを通して聖霊が働いて、人の心に生まれさせるものです。作者は聖霊に導かれ、真理を書いたので、人々の反応を気にする必要は全くありませんでした。神のことばに従うか、神のことばを拒絶するかは、一人一人が責任を負うことだからです。ですから、作者は神の教えに対する人々の反応よりも、神のことばに対する自分自身の反応を5節から8節に書きました。

作者は自分が罪深いことを自覚していました。自分の知恵や価値観や好みに従って歩む道が危ういことを自覚していました。神の助けと導きがなければ、堅くてしっかりした道、つまり、全き道を歩めないことを知っていました。作者は105節で「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」と書いています。105節も、神の助けと導きがなければ、人間の歩みは危ういことを教えています。最初の両親が神に背いた瞬間、人間の本性は汚れてしまったので、神が聖書によって助け導かなければ、人間は罪という真っ暗闇の中を歩んでいる状態です。足もとを照らしてもらわなければ、安全で安心な歩みはできないし、すぐにつまずいてしまいます。

作者は「私の歩みは罪のために危ういので、堅くしてください。」と神に頼っただけでなく、罪の解決策についても全面的に神に信頼しました。神の御前で自分の努力や功績を並べ立てて自分を誇ることなく（ルカ18:11,12）、神が救い主（メシヤ）を通して差し伸べた恵みの赦免に信頼して、「私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはありません。」と告白しました。これは、「私はあなたの戒めを全部守っています。」という過信ではありません。「あなたの戒めによれば、私は罪人ですが、救い主を信じる信仰の恵みによってあなた御前で全き人と認められたので、私はあなたの法廷に出ても罪人という宣告を受けることはありません。」という告白です。だからこそ、「あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。」とすることができました。もし神が義のさばきを行なう時の赦免を確信していないなら、それについて学ぶ時に正直な心で感謝することはできません。

ダビデもこの箇所と同じ幸いを詩篇32篇1節と2節で以下のように書いています。「神によって罪を赦された人は幸いだ。神が罪を認めず、罪や神の罰によって心が責められない人は幸いだ。」そして、パウロは詩篇32篇1節と2節を引用して、神の恵みによって罪が赦される幸いをローマの信者に教えました（ローマ4:6-8）。このような幸いを実感している人は、神や人に対して誇るためでもなく、罪の赦しを獲得するためでもなく、自分では償え切れない罪を完全に赦されたことへの感謝の心から、喜んで神の教えに従います。従えなかった時には素直に罪を認め、「従える強さを与えてください。」と祈ります。また、「どうか私を、見捨てないでください。」と祈ります。そして、聖書の福音によって、「イエスを救い主と信じる人を神は絶対に見捨てない。」と確信します。このような確信を持てる人は何と幸いでしょう。パウロも、どんなものもイエスによって示された神の愛から信者を引き離すことはできないと、ローマの信者に強調しました（ローマ8:38,39）。イエスに導かれて歩む人は、この世からは哀れに見えるかもしれませんが、この世の終わりにすべての死人と生きている人を集めて義のさばきを行なう神からご覧になれば、幸いな人です。アーメン。